斧の舞

泉鏡花作

一

「おゝ甚藏よく來てくれた、よく來てくれた。」

上座に控へた座蒲團から乘出いたのは、此のあたりの、大福長者の隱居で、自ら機嫌齋と歌する老人、左右に二人、居流れて又四五人、親類のもの、出入の町人などが、一盞傾けて居る子の刻頃、末席へにじり出でて敷居越に平伏したのは、即ち甚藏といふ大工の棟梁である。

「へい、今晩は、」といひながら一座の人に面を向けた、年紀の頃五十二三、太い眉毛が柔和な目を放れて額の眞中あたりに房りと、鼻は隆いが、うけ口と俗にいふ下唇が出て、頤髯を剃つたあと、輪造つて蒼く、道化形といふ顔色。ものいひ打沈んで、畏つた膝へズバと置いた手の不恰好さ加減、これで針の耳に屋を造り、海の上に樓を建つべき腕前。

「やあ、棟梁か、爺さん、」と坐したるものは皆口々に歡び迎へた。

機嫌齋は取りあへず、ついと杯をさして、

「いや、甚藏早速に來てくれて難有い、飛んだことを話つて遣つて嘸ぞ迷惑ぢやつたらう。しかしの、之は決してお前の所為といふのではない、又お前の知つたことではないが、唯相談をしたいぢやから、惡く取らつしやらぬやうに。實は此の事についての、加持祈祷なりと頼まうか、方にあたつたとでもいふ事なら、除けてでも貰はうかと、一全寺の御老僧、三慧上人の處へ參ると、彼のねぢくれ坊主の、狸和尚め、出家といふ名さへあるものに、家の相談を持込んで何になる、其の道の者に聞け。一體三階の別荘を建てたのは誰ぢやと問ふから、甚藏でえすと言うたらばの。

むゝ、棟梁ならば心得があらう、尋ねるが可いと恁う謂はれたで、早速使を遣つたが、私は早や昨夜も本家の方へ遁げ出さうかと思つた位、お前が來て又思案があらうも知れぬと、最う一晩我慢をすることにしたが、何分恐しくつて、この別荘に居るだけの人數では凌ぎ切れぬ。

處で恁うやつて皆様においでを願うて、酒で紛らして居る最中、いや、此處においでのお方々も、そ

んなことがあるものか、試にと、皆ござつて、一度は怯かされた人ばかり、聞おぢをして新手は來ず、本家のなんざ、好い若いものの癖に、眞平と云うてしりごみをいたしをるわ。私も痩我慢を張らずに早く城を明け渡せば可いのぢやが、風流がるではなけれども、いかにも居心、間取の工合、三階の又ない景色といふものに未練が殘つて、何分にも思切れぬが、甚藏や、何とか工夫はあるまいか、」

「唯々、」

510

いづれも屹と甚藏の方を見詰めたのである。

「仔細は承りましてござります、何か毎晩天狗ばやしでお暴れなさつて、三階を揺ぶらつしやるとか申すこと。」

傍から、

「棟梁全くだぜ。」

「早や惡い、いたづらをなさります、棟木も柱も魔性が欲しがらつしやるやうな、因縁のあるものはござりませぬ、私が口からは申憎うござりますが、釘のゆるみますやうなことはいたしませず、屋板が高いと申しましても、空を通らつしやる邪魔にはな

りませぬほどに、心がけて置きましたものを、何といふわるさでござりませう。」

と奇代なことを謂ひ出したが、怪しいものに縁のあることを聞カせられて、さらぬだにの一同、灯を眞中に顔を見合せた、恰も二百十日の庄屋のやう。

二

甚藏は座を慎み、唇に掌を蔽うて小さな咳をしたが、

「亡くなりました親方でございますと睨みが利きましたなれども、私では何うございませうか。」

「ふむ、」

「けれども心得がございまするで、兎も角もいたして見ませう。何は、丑から寅の刻の間でございますな。」

「甚藏大きな聲を出すな、」と慌しく一人がいふと、機嫌齋はあるかなきかの音を以て、

「然うだ／／、」と打頷く。

甚藏は膝に兩手をついたまゝ、陰氣が滿ちて人の顏色も薄暗い、四邊を陶し、

「子の上刻過ぎたやうでございます、私はこれから三階へ參つて番をいたします。皆樣は召あがつておいでなさりまし、いえ、大切なことでございますから、私は今夜は頂きません。」と居直つて席を開かうとする。

「甚藏、お前、一人で三階へ行くか。」
「お憂慮なさりますな。」と落着いて謂ふ老棟梁、其の夜は異様な扮装、裁着袴を一着して、手織の縞の袷の上へ、ちやん／＼のやうな小さな肩衣を引かけて居た。仔細は知らず、ものありげな甚藏の様子は、見るから頼母しいのに、いざ立たうとすると、袂から一條の火繩を出して、輪にした端を火鉢にくべると、芬と燻つて、人々は又た之にぎよつとした。
機嫌齋堪りかねて、

「甚藏、」
様梁は起ちがけの煙草を立續けに二三服、
「外の火は危うござります。」
丁ど火繩の尖が、火になつたから片手に取り、兩提の煙草入は其まゝ差置いて、やがて身を轉じて次の室へ出たので、機嫌齋が眞先につか／＼と立つと、一座は思ひ／＼に後からついて出た。
唯見ると、甚藏敷居際に蹲つて、手をかけ、取り上げようとしてゐるのは、磨ぎ澄ました凡そ十斤はあらうといふ、一挺の斧である。
宅から持參で、酒の席へは遠慮して持つては入ら

なかつたものと見える。餘りの思ひがけなさに、一同は異口同音、怪訝の呟を交へ、質問の聲を呈して、ばら／＼と甚藏を取巻いた、中にはランプを捧げて居る男もあつた。

「呼吸入れると、斧を揚げて、屹と裁着の腰へ、山の端に半ば月の形の大なる如き、鋭き刀を空ざまに構へたので、いづれも思はずハツと退く。

と甚藏は仕事にかゝるやうな面色で、

「お憂慮なされますな、」と再ひ謂つた。

「何うするんだい、」

「棟梁金時の茶番ぢやあるめえな。」

じつと様子を瞻つて居た機嫌齋は、思ふ處あるらしく、

「黙つて、靜に、」と立合の口を制して、

「甚藏、濟ないの。」

「何ういたしまして、」といひながら猶豫はず、取附を右へ曲つて、冷い疊の上を、斧も重たげな足取、無雜作といふよりは、寧ろよた／＼と歩行いたが、其の段階子に臨んだ時は、主人だけに機嫌齋が、手づから灯を取つて續いたばかり。客は盡く間を一

つ隔たるさへ容易くは為し得ないのであつた。謂ふまでもないが、魔の風は襖のあけたてに囚つて、無人の境から衆人の座に浸入する。

「もう宜うございます。」

「いや、來いというても此の上へは行かれぬのぢや。」と機嫌齋は苦笑。甚藏は肩を揺ると、うむと一息、斧の柄を太く廻して、肩へどつしりと掛りかけると、腰を捻つた、左手の火繩を宙に翳して、早や一段。

三

向脛を固く、足首をくひつたやうに、裁着の裾を結へた甚藏の素足は、左右、機嫌齋が差出す灯に、段の中ほどを一上一下したが、ふツと消えて眞間になつた。餘人ならば、けたゝましう氣經の聲を上げたであらう、機嫌齋は小刻に引返す。

下のものには跫音も聞えないで、甚藏は火の氣といふものの更にない、二階の廊下の暗を探つて、南から北へ、時々火繩の赤い點が縱横に絲を引く。

勿論、板一枚といへども、渠が心を籠めた家造である。堪藏は柱も探らず、やがて東の裏から三階の段階子に踏みかけて、攀づるが如く眞直な段々、心して一段づゝ。

暗の中に、雲の棧を昇つて、三階の六疊に入つた。數寄を盡してあるのだけれども、窓々の戸は塞いだり、雨戸は閉めたり、黒白も分たず、其を開けようともしないで、甚藏は我家のくらがりに入つたやう。

床柱の釘へ、件の火繩を引懸けると、身は床を正面に、眞中を稍しりへの方、七分三分の處を卜して、刀を天井に向けて斧を引着け、大胡坐で腕を拱いて、うむと息、渠は寂莫として控へたのである。

市内八萬の家、就中高い病院の屋根の突尖なる避雷針を、二階から下に見る、此の三脚の叫室は、市街の宙天に浮出したやううに、絶對の高さである。

怪しきものが障礙をなすといふ室の内に、然も深更、右も左も、唯吹いて通る風ばかりの處に、彼は泰然として居た。

時は一秒を刻んで、夜は粉微塵に、細く小く、こまかく、短く、微になつて更けるのだけれども、悪魔の身體が此の四壁を封じて、人類の棲息する世の物音から隔てるのであらう、ソヨとの響もせぬ。

棟梁は息を凝して居る。

丑の半刻と思ふ時、坐つて居る疊の目が、一ツ一ツむく／／と、装上るが如くに感じて、甚藏は片膝立てた。

背後の丘に名も高き、天狗ばやしと思ふあたりに、物凄じき響があると、火繩は桂から障子を傳ひ、壁

を擦つて、きり／＼と矢の如く、又た蜘蛛の巣を投げるやう、目ばたきをするより疾く、室の周囲をぐる／＼／＼。

斧の柄に、指の先が掛るが疾しや、甚藏はぬつくと立つて、東の片隅へ立向ふと、つる／＼落ちに疊は楯の如く傾いた。甚藏はうつむけにのめらうとしたが、屹と踏みこたへて、斧を曳一・と振被つて、發と一つ空を切つた、踵を返して、西の隅に向ふと齊しく、疊が又、ぐツと横に下るのを、立直つて丁と切り、南の方を丁と打つて、疊數、其の六疊の眞中で、爪尖を揃へて寂然と立ち直り、斧を胸下りに取直し、刃形を向けて天井を屹と見る時、龜甲形に揺れに揺れたのが、

はたと留り、火縄も舊の所にかゝつて、再び寂然としたと思ふと、屋の棟の處に、固つて、ものの七八十人、聲を揃へて高笑をする聲、哄と、それから烈しい風が吹いたが、別荘はもう礎からゆつさりともせぬ。

【完】